



東都書房

第三の被害者

笹沢左保

第三の被害者 定価 290円

昭和37年 6 月 25日 第 1 刷発行

著 者 笹 沢 左 保

© Saho Sasazawa 1962

発行者 西 村 俊 成

印刷所 株式会社常磐印刷

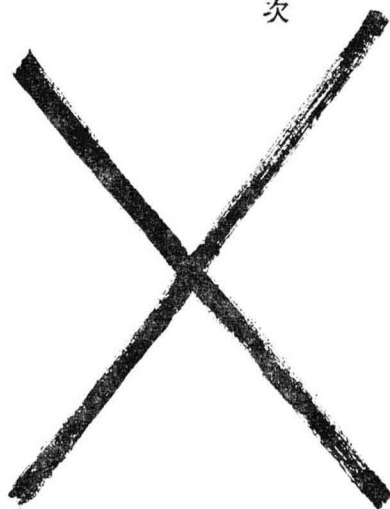
製本所 大光堂黒岩製本所

発行所 東 都 書 房

東京都文京区音羽町 3 丁目 19 番地
電話(941)3111 振替(東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします

目次

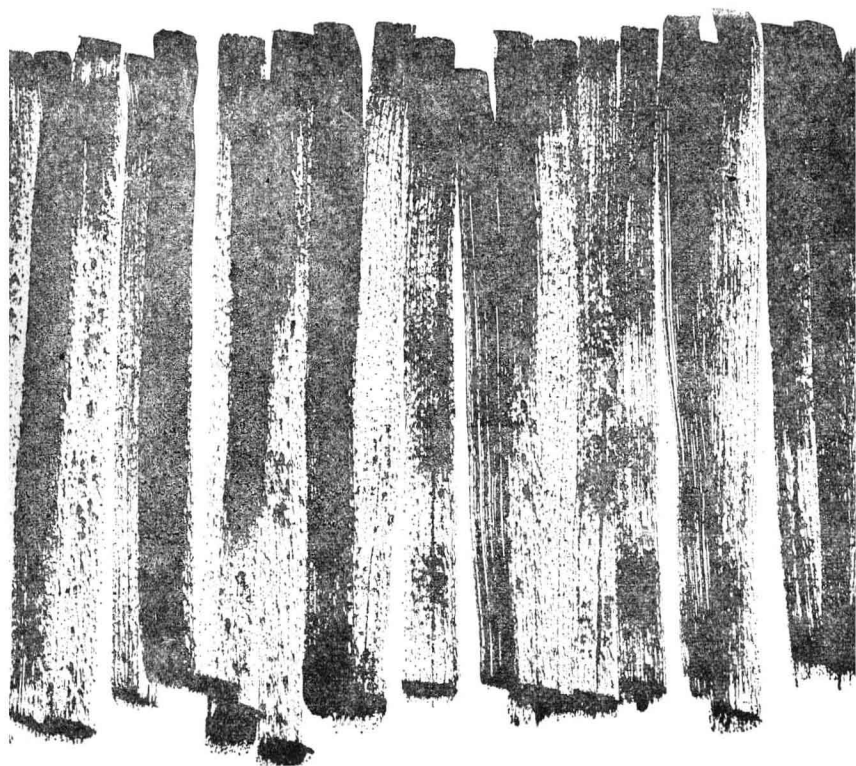


第三の被害者	墓場の存在	六本木心中	純愛碑	死視界
あ	と	が	き	
229	187	163	109	57
				5

装
幀

福
嶋
祥
介

死視界



南側の窓からの眺めは広大だった。青山墓地の樹林が見渡す限り、波打つように続いている。初夏はそれが萌黄色もえぎいろの絨毯じゅうたんになり、夕暮れ時になると、その表面だけが赤くぼかし染めにされる。

冬の夜は、一帯が黒い海のように見えて、霞町から六本木にかけてネオンや灯が、対岸の町と錯覚しそうだった。

東京の中心に位置しながら、このあたりに喧騒けんそうというものがなかった。実際には音があっても、高台という地形の、周囲の空間の大きさが、それを吸い取ってくれるのかも知れない。

棟数は一号から三号まで、三棟あった。世帯数は計六十世帯だった。棟数の割に世帯数が多いのは、一棟が五階建ての建物になっているためである。一世帯に六畳、四畳半、台所、便所、とこれだけの設備があった。風呂はついていない。その代りにというわけではないが、六畳の南側に幅三十センチほどのベランダがついている。このベランダは、別に役に立つものではなかつ

た。せいぜい、ここに立つて青山墓地でも眺めるか、夏の午後、痛いほど吹きつけてくる風を顔に受けるか、そのくらいのものである。ペランダには、大人の腰あたりまでの高さの鉄柵が、とりつけてあったが、子供のいる世帯では危険でもあり、殆どガラス戸を締めつきりだった。

建物そのものは新しくなかった。去年の台風の際には、雨もりした部屋もあった。しかし、住み心地は決して悪くなかった。難点と言えば、こっちの四畳半と隣りの台所との壁が薄く、時折、隣家の話し声が聞こえることぐらいである。

浅香修造は、こんな都営アパートに住んでいた。修造の部屋は、三号棟の五階にあった。家族は妻の律子と二人だけである。この都営アパートが出来た時からの入居者だった。四人家族という細工をした申請で入ったものである。

浅香修造はK電機に勤めていた。モーターを始め家庭電気機具の製造会社では、大手五社の一つに数えられるK電機だ。勿論、K電機ほどの一流会社ともなれば、立派な社宅なり社員アパートなりがある。しかし、どういうわけかK電機では管理部門の社員を社宅には入れなかった。管理部門の社員たちが共同生活すると、会社に対する批判やいろいろ情実といったものが絡む、などということを危惧するのではなからうか。

修造は本社総務部の人事課員である。任用係主任という役付きだった。私立大学出の三十五歳にしては、まあまあ出世が早い方だった。

修造の朝は早い。大抵、五時には布団から出る。これと言って、そうする理由はなかった。一種の習慣である。精力的に赤ら顔の外見ばかりではなく、彼は健康だった。朝、目が覚めて、そ

のまま布団の中にいるということが出来ないのだ。動き回りたくて耐らなくなるのである。修造が几帳面きようめんなところと言え、この朝の早起きと毎月の銀行預金きんぎんだけだった。

しかし、この二日ばかりは珍しく、修造は目覚時計に起された。新社員の採用試験があったからだ。この十月の新規採用期は、任用係が一年中で最も多忙をきわめる時だった。

求人難の年などと言われても、K電機入社試験の競争率は例年と変りなかった。第一次の学課試験では十五倍、第二次の面接試験で四倍の競争率であった。一次試験は二週間前に終わっている。二次の面接が今日であった。

修造は顔を洗い、寝巻のまま食卓の前に坐った。窓から見える空は、まだ乳色がかっている。日射しも寝起きのように鈍い。修造は寝巻の襟をひろげた。顔から首のあたりまでは血色がいいが首の付け根から胸にかけて急に肌が白くなっている。彼は、その胸の辺を掌てのひらで撫で回しながら、朝食の支度を待った。食卓の上には、配達されたばかりの朝刊が置いてあったが、修造はそれに手を出そうとはしなかった。彼はあまり新聞というものに興味を感じなかった。新聞に載っているようなことは会社へ行けば耳で聞けるのである。それに修造は自分の職務や家庭については熱心だが、それ以外のことには関心を持たないという性質ていしつだった。

ふと、隣家の台所から洩れてくる人声が耳についた。いつもならば、耳で聞いても頭の中までは入れないのだが、今朝の修造にはこの話し声が聞き逃せなかった。

「もう一度、浅香さんがお出掛けになる前にご挨拶しておいた方がいいよ」
「ああ」

「よろしく願いますってね」

「分かったよ」

「とにかく今日が、お前にとっては天下分け目の日なんだから……」

初老の女と若い男の声がそう言っている。隣りに住む和田順一郎と、その母親だった。母親が息子に、修造のところへ挨拶に行つて来いとすすめているのだ。

あの小母さんは全くご丁寧なことだ——と修造は苦笑する。和田順一郎は今年のK電機採用試験に受験した。妻の律子が聞き込んだところによると、順一郎がK電機に就職することは、彼の家族全員の宿願なのだそうである。

今年の春頃から、順一郎の母親の、修造に対する態度が目立って鄭重ていちょうになった。やれ到来物です。珍しいものが手に入りました、と何かにつけて物を持つては修造の部屋を訪れる。口にすることは、どうぞ息子をよろしく願います、に定きまめていた。

修造にとっては有難迷惑だし、面映いことだった。資本金五百億、発行株式総数四億株、株主数三十六万人という、怪物のような大企業内では、自分の存在がいかに小さいものか説明しても、この母親はどうしても理解しなかった。特別な縁故関係は別として、社員採用は個人の力で左右出来ないし、その代り不正もないのだ、と言っても、母親は修造に頼んでおけば大丈夫と信じ込んでいる。そこに彼女の考え方の古さがあった。

修造には、彼なりの情があった。和田順一郎が人社出来ることを、ひそかに期待した。もっとも期待であつて、願いではなかった。順一郎が受験に失敗すると、隣り合わせだけに、アパート

の生活が氣拙^{きまつ}くなりそうな氣がしたのだ。

一次の学課試験の結果は意外によかった。順一郎は総合成績で九十二点を取っていた。受験者中四位で一次試験を通過した。あと身体に異常がなく、思想的に健全で、面接試験の際に悪い印象を与えたりしなければ、採用は確実だった。学課試験を一位から十位までで通過して不採用だった者は、今までも例がない。K電機は技術部門の社員を採用する場合、あくまで学力に重点を置くシステムだったからだ。

これで修造は肩の荷がおりたような氣がした。早速、百パーセント採用確実だと、順一郎の母には伝えておいた。

それでもなお、今朝になって息子に挨拶して来るように促している母親の、律義さと用心深さに修造は苦笑したのである。朝食が終った頃、おずおずとドアをノックして、順一郎が顔を出した。

「今日も何分、どうぞよろしくお願い致します」

順一郎は形式的に頭を下げた。彼は母親と違って、こうした媚態^{びたい}が無意味だということを知っていた。

「ああ、頑張って下さい。十時からだから、遅れないように」

修造はワイシャツの袖に腕を通してながら、鷹揚^{おうよう}に頷いた。今朝は氣が楽だった。順一郎の採用は決定しているのも同然である。こうなると、修造は自分の尽力も大きかったのだと匂わしてみたくなった。

「まあ心配しないで、面接試験の相手を呑んでかかるくらいの方がいいですよ。小さな失敗があっても、その点はわたしが引き受けますから」

「お願いします」

順一郎はニコリともしないで、帰って行った。修造は肩すかしを喰わされたような気がした。順一郎がもう少し感謝の意を表してもいいはずだと思った。生意気な——と、そんな感情もあった。

修造の網膜には、ドアから消えた順一郎の顔がまだ残っていた。あの顔から受ける印象はともよくない——などと、修造は腹の底で呟いた。

順一郎の印象は確かに暗かった。優秀な学生によくある、内攻的な陰鬱さとは違って、順一郎の表情には翳かげのようなものがあつた。人生の辛酸をなめつくした五十男のように懷疑的な眼差しだつた。顔色は青黒く、ものを見る時に眉間にタテ皺じまを刻む癖がある。それが、受取りようによつては、ひどく反抗的な感じだつた。

とにかく頭はいらしい。年は二十六である。普通の受験者より、三年以上大学入学が遅れていた。高校卒業後一年ばかりの職歴があるところを見ると、家庭の都合でこの一年は働かなければならなかつたようである。

まあいい——と、修造は思った。どっちにしろ、順一郎はK電機の社員になるのだ。修造が小さなことにこだわっても、意味はなかつた。

「今夜も遅いの？」

と、妻の律子が洗いものを台所へ運びながら言った。

「多分な」

修造はすまなそうに、柔か味のある視線を妻へ向けた。

「なるたけ、早く帰って欲しいわ」

鍋を手にしたまま、律子は振り返った。

「このところ、宇佐見さんからしつこく電話がかかるのよ」

「宇佐見から？」

「そうなの」

「何だって？」

「お金を貸せっていうんでしょ。きつと」

修造のせいだと言わんばかりに、律子は咎めるような目をした。

「わたし一人きりの時に、あの人に來られるの嫌だわ」

「なぜだ？」

「だって……大きな声を出して、いつも酔っぱらっているみたい。柄が悪いんですもの。それに

……わたしを見る時、とても変な目つきになるのよ」

「どんな？」

「いやらしい……笑っているような、怒っているような、どっちともつかない目よ」

「あの男は、女を見る時には誰にでもそういう目つきをするんだよ」

「嫌だわ、本当に。あなた、あんな人とは絶交出来ないの？」

「そうも行かないさ。絶交する理由もない。まさかお前を妙な目で見るから、付き合わないなんて、子供みたいなことを言うわけには行かんだろう。それに、昔はいろいろと世話になったんだ」

「とにかく、あの人が来るんじゃないかなっていつもヒヤヒヤしていると、わたし、身体に悪いわ」

「うん。まあ、少しでも早く会社から帰るようにするよ」

身体に悪い——と言われると、修造にはいちばん応えた。妻にこのことを持ち出されると、大抵の場合は修造の方で折れてしまう。律子は妊娠中だった。結婚以来七年目で、先々月ようやく、その兆候がはっきりしたのである。子供を欲しがっていた修造は有頂天になった。律子との間に子供が出来ると考えただけで、彼は家庭が形作られたという実感を味わえた。

小柄な身体つきの律子では、腹部のふくらみはまだ目立たなかった。だが修造は最近、妻の身体を眺めるのが楽しみになった。妻の腹の中で、すでに赤ン坊が笑っているような気がするのである。もともと彼は律子を愛していたが、妊娠したと知った時から妻への愛おしさは倍加したようだった。その律子にもしものがあつたら大変だと、修造は思った。神経を苛立たせるのが妊娠中の母体に最もよくないことだと、婦人雑誌の特集記事に出ていた。流産でもされたら、子供はもう一生諦めなければならぬかも知れない。律子はすでに三十なのである。

用事は会社へ電話するように宇佐見に言えればいいのだが、肝腎の宇佐見の連絡先が分からなか

った。宇佐見圭介は、かつての修造の同僚だった。最初からサラリーマンらしくない男であった。制約を受けるのが苦手で、やるのが奔放だった。マージャンと酒と女と、三拍子揃っていた。人に嫌われる男ではなかったが、意志の弱い者にありがちな、嘘つきでハツタリを利かせる性格だった。

八年ほど前、課の旅行積立金二十一万円を持ち逃げして、会社から姿を消した。月賦の未払いを含めて総額六十万円以上の借金も、踏み倒して行った。その後、警察に逮捕されて刑にも服したらしいが、どういうつもりか去年あたりから、二度三度と修造のアパートへ顔を見せるようになった。来ると言っても、ただ昔の調子で大法螺を吹いて、飯にありついて帰るといった程度だった。しかし、最近になって、しきりに金を貸せというようなことを口にするのである。修造が金を貯めていることを、それとなく感じ取ったのかも知れなかった。宇佐見の話によると、現在やっている芸能プロダクションに、資金がいるということだったが、いずれにしても信用すべき言葉ではなかった。

出勤間際に宇佐見の話が出て、修造は少しばかり不愉快になった。妻子のいないお前には、こういう不快感は分らないだろうと、今度宇佐見に会ったと言おう——修造は、そんなことを考えながら靴をはいた。

しかし、アパートを出たとたんに、修造の胸にあったわだかまりは消えた。彼はこの一日の軌道に乗った。長い間の習慣が、修造の行動と精神を直線的な鑄型に流し込む。彼は機械的な足どりで歩き始めた。彼の姿には一分の隙もなかった。そして爽快な秋の澄んだ大気が、修造の仕事

への意欲を膨脹はうちようさせた。彼は、小学生たちに追いつかれながら、高台を下って行った。

2

銀座尾張町から三原橋寄りに建てられたK電機本社ビルの六階第二会議室には、倦怠と緊張が入りまじった空気があった。窓ガラスを透して射し込む日の光に、室内は眩しいほど明るかった。その日射しを背に受けていると、睡気を覚えそうだった。事実、面接試験員の中には、欠伸あくびを噛み殺して目に涙を溜めている者もいた。午前十時から多勢の学生を相手に、同じような質問をして形式ばった答を聞いている者の身にすれば、それも無理はなかった。

それに対して、受験者たちは真剣そのものだった。表情は固く、何かに憑よかれたような目をしていて。試験員の前に坐った時の、拳の握り具合、指先の動かし方で、針のように神経を尖がらせていることが分かった。

試験員側の余裕と受験者側の緊張が、時折触れ合って、そこに短い沈黙があったりする。

第二会議室の中に、面接試験所は二箇所あった。一般職受験者と技術職受験者と分けて面接しているのである。受験者たちは、言い合わせたように黒い詰襟の学生服姿だった。

浅香修造は、技術職の面接試験所にいた。試験員は四人だった。真中に重役が一人、左側に総務部次長、右側は技術研究所長と人事課長である。修造は人事課長の脇にある席についていた。修造の仕事は、選考書類の配布と取りまとめであった。